

塩釜の復活

アウグスチヌス 児玉雄允 (新潟教会)

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県塩釜市に、3月28日から30日まで、災害ボランティアの一人として滞在しました。新潟県中越沖地震の際、柏崎市の高齢者施設で介護ボランティアの経験がありましたので、坂本耕太郎神父さまから災害ボランティアのお話をうかがったとき、何の躊躇もなく、一緒にしたいと申し出ました。

とはいえ、この度の震災は、地震と津波の発生からすでに2週間が過ぎているにもかかわらず、ライフラインの復旧は遅れており、救援物資の供給も満足ではなく、さらには深刻なガソリン不足が生じているとのことでした。新潟を出発する前日に目を通した仙台教区サポートセンターからのボランティア希望者への通達には、あらゆる物資の現地調達が困難なため、滞在中の食料、毛布、軍手、ロウソク、トイレットペーパーにいたるまで、すべて持参するようにと書かれていました。そのような過酷な環境のなかで、被災された方々のために、はたしていったい自分に何ができるのか、不安にならずにはられません。この震災はこれまでの災害とはまるでちがう。被害そのものが何かとてつもない怪物のように思えて、体が震えました。

塩釜市に到着して、塩釜教会の信徒の方に被害状況をうかがったところ、塩釜市は高台の多い地域で、宮城県のなかでも南三陸町や石巻市と比較すると、津波による死者・行方不明者は少数にとどまったとのことでした。それでも、津波にのまれた市街地を歩き、火災のあった石油コンビナートのある港湾を目にすると、被害の甚大さに驚愕せずにはられません。押し流されてきた無数の瓦礫が公園の花壇や砂場に散らばり、潰れた自動車が道路わきにくつも連なり、遠洋漁業の大型漁船が堤防に打ち上げられています。そしてなにより、ヘドロの匂いが強烈です。下水掃除をしたときにかき出される汚泥のそのものの悪臭が街を覆っていました。やはり塩釜市にも巨大な津波が押し寄せ、その中を人々が逃げ惑い、命を落としていったのです。被害の大小にかかわらず、塩釜の人たちはまさに地獄を体験し、いまなおその地獄はつづいている…

塩釜教会は、震災発生から一週間後の18日以降、ボランティアスタッフの宿泊所となりました。板の間の会議室や聖堂の床にまで畳が敷きつめられ、ボランティアスタッフがいつでもごろりと横になれるようになっています。すでに市内のライフラインのほとんどは復旧していて、使えないのはガスだけ。教会には食料も毛布もトイレットペーパーも十分にそろっていました。朝食と夕食は、カセットコンロを使って、数人のボランティアスタッフが持ち回りで宿泊所にいる全員の食事を用意します。それまで過酷な環境を想像し、実際に塩釜の光景を目の当たりにして気持ちが沈んでいただけに、塩釜教会がまるで天国のように感じ

ました。老若男女、様々な方々が様々な地方から、有志でボランティアに来られていて、新潟から参加した私たちをふくめカトリック信徒はむしろ少数でしたが、神の愛の宣教者のブラザーたちの姿がありました。夕食の後、余震に揺れながら、全員で車座になって当日のボランティアの様子が報告されました。そこで、今回のボランティアに参加した人のほとんどが、専門の資格の有無に関わらず、津波の被害にあった一般住宅の汚泥の除去と家財道具の整理に当たっていることを知りました。

塩釜市にかぎらず、宮城県の広い地域で、「捨てる」ことを「投げる」というそうです。汚泥の除去と家財道具の整理にうかがったお宅の奥様から教えていただきました。そのお宅は奥様とご主人の二人暮らし、どちらもご高齢で、ご主人は介護用のベッドに横になったままの生活、ご主人の介護は奥様がお一人でされていました。二階建ての素敵なお家は改築してまだ5年、地震の際はお二人とも家のなかにおられ、奥様の首まで津波が押し寄せてきたとのこと。一階部分は「まるで海のなかにいるよう」で、ご主人はベッドに横になったまま津波を被りましたが、幸いなことにお元気だとうかがいました。

私たちボランティアスタッフは朝の9時にお宅に到着し、マスクにゴム手袋、膝まである長靴という格好で、午前中は津波が運んだ一階部分の汚泥をかき出したり、箆のなかに溜まったままの大量の海水を捨てたりしました。とにかく泥、泥、泥。台所がいちばんひどく、戸棚の中や流し台の下の収納スペースなどを完膚（かんぷ）なきまでに泥まみれになっていました。そんななかで、3月11日の朝日新聞の朝刊だけが、まるで今朝届けられたかのような真新しさで奇跡的に残っていました。

午後からは家財道具の整理にとりかかり、そのときに「投げる」という言葉を聞きました。「宝物のように大切に」にしていた食器、着物、骨董品など、一階部分にあったほとんどすべてが泥にまみれ、使いものにならなくなっています。ですが、奥様はなかなかそれらを捨てることができません。お気持ちは痛いほどよく分かりました。そこに、ご夫妻の娘様がお手伝いに来られ、「お母さん、そんなふうになっちゃったもの、取っておいてもしかたがないでしょ！」と一喝されました。奥様はしばらく落胆しておられたようですが、なにか吹っ切れたような顔をされ、「そうね…」とうなずき、「このお着物、どうしますか？」とたずねるボランティアスタッフに、「投げてください」とはっきり口にされました。それからもう、わずかなものを残して、ほとんどの食器、着物、骨董品を次から次へと「投げて」しまわれたのです。あまりに豪快に捨ててしまわれるので、ボランティアのほうで「あ、この置時計はきれいにしたら使えると思うんですが」と声をかけたほどです。

がらんとしたお宅から外に出て、近くの空き地にゴミとして山と積まれた家財道具を前にしたとき、奥様は、「どこから手をつけたらいいのか分かりませんでした。これですっきりしましたよ。ありがとう」と私たちに話してくださいました。「家を改築してよかった。これま

では平屋だったの。いまは娘のところにいるけれど、二階は大丈夫だから、はやくお父さんといっしょにこの家で暮らしたい」。その言葉に、私だけでなく、その場にいたボランティアスタッフの皆が胸を打たれたにちがいありません。

その日の夕方、ボランティアの仕事を終えて塩釜教会に戻り、夕食の支度ができるまでの時間、お隣の塩釜カトリック幼稚園の一室で、神の愛の宣教者会のブラザーたちとともに、とても穏やかで暖かい雰囲気のごミサにあずかりました。

「今や、高官も預言者も指導者もなく、焼け尽くす捧げ物もいけにえも供え物も香もなく、憐れみを得るために献げ物を御前に供える所もありません。ただ、砕かれた魂とへりくだる心を持つ我らを受け入れてください」

第一朗読のダニエルの預言のその箇所を、被災地の夕暮れのなかで聞くことができ、心より感謝します。私は今年のクリスマス・イヴに洗礼を授かったばかりですが、打ち砕かれた人々とともにあることの意味と、その喜びがどのようなものなのか、生まれて初めて深く心に突き刺さった瞬間でした。

ドロシー・デイは1906年のサンフランシスコ大地震のとき8歳で、被災した人々が物心両面で支えあう様子を「危機的な状況がつづくなかで、人々は互いを愛していた」とのちに書いています。彼女の過激ともいえるラディカルな活動の出発点が、大地震のさなかに芽生えた人々の愛にあったことはまちがいありません。この日本においても、たとえば1995年の阪神大震災は日本のボランティア元年と位置づけられていて、確かにあの震災が私たちに助け合うことの素晴らしさを教えてくれたにちががなく、それ以前とそれ以後では人々の心のあり方にはっきりとした分水嶺があると思います。それでも、実際に災害ボランティアの一人として、打ち砕かれた人々とともにあることを体験したこの2011年の東日本大震災こそは、キリスト教徒となったばかりの私にとって、善きサマリア人であることの意味と喜びをはっきりと自覚した記念すべき年になりました。

岩手県釜石市で被災された82歳の女性の言葉がいまも胸に残っています。「乗り越えられない試練はありません。大きな試練をプレゼントしてくださった神に、頭を垂れて感謝の祈りを捧げます」。私が82歳になったとき、彼女のような言葉を神に捧げることのできる人生を、これから長い時間をかけて歩んでいきたい。

塩釜教会の主任司祭アンドレ・ラシャペール神父さまのご冥福を心よりお祈りいたします。

(新潟教会「双塔」復活祭号 2011年)